

## 「牧口常三郎研究ノート」新蒐集文献の覚書（3）

山 口 徹

「小学校郷土問題の解決に一部の盡力を望む」

雑誌「教育界」の第16巻第3号（1917年＝大正6年1月3日発行）に掲載された。

岡田良平の文部大臣就任（1916年10月9日）に合わせて特集された同誌の論説「岡田文部に何を望むべき乎」に、「大正小学校長」として寄稿している。牧口は45歳である。

短い分量なので、ここで全文を紹介しておく。

「行政の長たる文部大臣にしかも一見学政に直接関係なきが如き斯かる問題の解決をといふが如きは、怪むべしとなすものもあらん。されど吾等の見る所にては、決してしかく些末の問題にはあらず、学制上緊急なる重大なる問題と思ふ。単に地理科のみならず、歴史も修身も此の問題を蔑にしたる教授にては眞に砂上の楼閣に終り、國定教科書の知識は、國民の實生活と没交渉なりと断言し得べしと信ず。而して之れが解決には、教科課程及其の配當時間に大異動を生ずべし。これ本題の提出の理由なりとす」

### ■寄稿者の氏名

特集への寄稿者とその肩書きは、以下の通り（雑誌への掲載順）。

澤柳政太郎（文学博士）「岡田文相に望む」

湯本武比古「学制改革問題の解決を望む」

藤原喜代蔵「純教育外に於ける岡田文相に対する註文」

相原熊太郎（文学士）「國語の独立を」

渡邊英一「岡田文相に望むこと」

根本正（衆議院議員）「國民教育費を國庫支辨にせよ」

大津復活（普通教育社社長）「直言献策を期す」

寺田勇吉（精華学校長）「左の二件を希望す」

石田新太郎（慶應義塾幹事）「希望三件」

肝付兼行「岡田文相に興ふる歌」

西山愨治（私立帝國小学校長ドクトルオブペタゴギー）「國民教育調査會を起せ」

坪谷善四郎「常識と人格の養成に注意せよ」

佐々政一（文学博士）「豫算を豊富にせよ」

佐藤稠松「希望二件」

爲藤五郎（東京日々新聞記者）「希望五件」

竹原素峰（教育の實際主幹）「希望三件」

---

Toru Yamaguchi（聖教新聞記者）

川本宇之介「補習教育を義務教育とせよ」  
市川源三（東京府立第一高等女学校教諭）「希望三件」  
相澤熙（国民新聞記者）「中等教育の改善を希望す」  
狩野力治（文検世界主幹）「岡田文相に望む」  
川村理助（培風館主）「時局に鑑みよ」  
小西信八（東京聾哑学校長）「盲哑教育に対する希望」  
西原和治（現代教育記者）「下級教員の俸給をあげよ」  
大島正徳（内外教育評論主筆）「月並にして必要なる三件」  
杉浦鋼太郎（大成中学校々主）「文部大臣を政變圏外に置け」  
中村春二（成蹊実務学校長）「精神的方面の整頓をなせ」  
菊池謙二郎（水戸中学校長）「御返事」  
堀尾太郎（教育資料社々長）「實業学務局の復興を望む」  
蛭田太郎（東京市四谷第四小学校長）「希望五件」  
三輪田元道（文学士）「人に仍て教育せよ」  
斯波貞吉（萬朝報主筆）「教育家と社會の關係を密接にせよ」  
江原素六（貴族院議員）「國民道德の阻害をなすな」  
多田房之輔（日本之小学教師主幹）「教育界の代表者として輿論の貫徹に努めよ」  
町田則文（東京盲学校長）「盲聾哑教育令を發布せよ」  
津崎尚武（法学士）「希望六件」  
牧口常三郎（東京市大正小学校長）「小学校郷土問題の解決に一部の盡力を望む」  
稲毛詛風（教育實験界主筆）「希望十件」  
磯江潤（京華中学校長）「希望二件」  
三浦藤作（帝國教育記者）「優良教員を優遇せよ」  
色川罔士「一生涯御盡力を望む」  
玉利庄次郎（東京日々新聞記者）「余の希望」  
松田茂（東京市小川尋常小学校長）「希望二件」  
金僊生「最後に一言」

#### ■岡田良平について

岡田良平（1864＝元治元年～1934＝昭和9年）は明治～昭和期の教育行政の実力者。1887（明治20）年に帝国大学哲学科卒業後、第一高等中学校（＝第一高等学校の前身）の教授を経て、1893年に文部省に入省した。参事官・視学官・書記官兼会計課長、実業学務局長、総務長官などを務め、1904年に貴族院勅選議員に、1907年には第2代の京都大学総長に就任。1908年、第2次桂太郎内閣の文部次官の後、寺内正毅・加藤高明・第1次若槻礼次郎各内閣の文部大臣を務めた。

1929年には枢密院顧問官となり、1930年には産業組合中央会会頭にも就任している。

農村社会を基盤とした勤儉節約を旨とする「報徳教」の信奉者としても知られる。

岡田が1度目の文部大臣（寺内内閣）に就任したのが1916（大正5）年の10月で、如上の『教育界』での特集論説は、これに合わせて企画されたものである。

■「郷土問題」

牧口は表題に「郷土問題」と掲げている。

この「問題」とは、何を指すのか。それは、彼が『人生地理学』に続いて著した第2著作『教授の統合中心としての郷土科研究』（1912〈大正元〉年）に明らかである（『牧口常三郎全集』第3巻〈第三文明社〉所収）。

ここでは『郷土科研究』の中身にまで立ち入らない。佐藤秀夫が『郷土科研究』の内容について簡潔に要約している『全集』解題を紹介しておこう。

端的に言って、本書は、愛郷心の育成を目的とする「郷土教育」、他教科と併立する単なる一教科としての「郷土科」、または授業の導入としての「郷土観察」方法等々を論じた書ではない。要約すれば、これは第一に初等教育のカリキュラムの根本的な改革を論じた書であり、第二にはこれと関連して授業過程の根本的な改革を提唱した書である。（『全集』第3巻 p 336）

また、佐藤はこのようにも解説を加えている。

梅根悟はかつて、本書を評して「わが国におけるコア・カリキュラム的教育過程論の最初の文献として記念すべきもの」と述べていた。戦後の一時期に盛行したコア・カリキュラム運動は、文部省の「学習指導要領」基準の強化方策の前に挫折した。教科課程が国定されていた当時でありながら、敢然としかも論理的科学的な手法をもってカリキュラム構造の抜本的な変革を主張し、その見地から「教授の統合としての」の一句を書名の冠頭に掲げた本書の画期性は、あまりにも鮮明だったといわなければならない。第一次新教育（大正新教育運動）がカリキュラム問題を回避して専ら狭義の教授方法改革にのみ没しきったと評価されるなかで、その発足の初期にすでに国定カリキュラムへの批判と変革を提起し（初版）、ファシズムと戦争体制の進行により新教育運動が逼塞した時点においてその変革論を一層鋭く展開させた（改訂第十版）本書の存在の意味は、今日においてより深くかみしめられなければならないだろう。（『全集』第3巻 p 340-1）



『牧口常三郎全集』第3巻 p 48より

『郷土科研究』は、既存の教科構造での教育を、「郷土科」を中心にした教科編成へと根本的に変更すべきであると訴え、「国定小学教則への全面的な挑戦を行なった」（佐藤解題）一小学校長の直言である。

その訴えの「過激」さは、「小学校郷土問題の解決に一部の盡力を望む」に見える、「地理科も歴史科も修身科も、郷土科をカリキュラムの中心に据える教育改革を為さなければ砂上の楼閣に終わり、授業で教える知識は国民の実際生活と没交渉になると断言することができる」（ゆえに）教科課程およびその配当時間に大異動を生ずべし」（趣意）等の件（くだり）に充分にあらわれている。

21年間で10版を重ねるほどに売れ行きは好調だった『郷土科研究』は、『人生地理学』（1903

年)と『創価教育学体系』(1930年)とを結ぶ長編著作であるにもかかわらず、第4著作『地理教授の方法及内容の研究』とともに、この60年間、ほとんど学術研究の光が当てられることがなかった。さらなる研究が待たれる。